

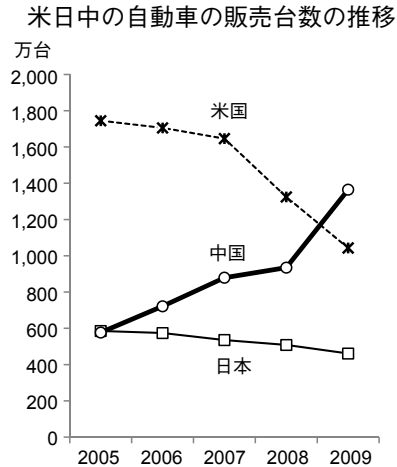
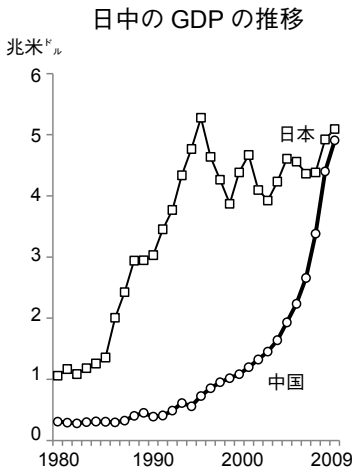
## はしがき

およそ10年前のアジア通貨危機当時、「中国発の第二の危機到来」を煽り立てる有名新聞があった。しかしながら当時は、名宰相朱鎔基の巧みな舵取りのもとで、逆風を逆手にとって飛躍し、WTO加盟までこぎつけた。

2008年秋のリーマンブラザーズ破綻を契機とする世界恐慌に際して、中国当局はいちはやく「4兆元の内需拡大」政策を打ち出した。この素早い対応は中国内外に対して「アナウンス効果」をもたらし、早くも2009年3月末には「景気底入れ」を示唆する指標が現れた。

チャイメリカ（Chimerica）すなわち「衰えたアメリカを支える元気のいいチャイナ」という構図は、誰の目にも印象づけられ、G20の金融サミット等における中国の一挙手一投足に、世界の耳目が釘付けされた。

- (1) GDPを見ると、中国は2007年にドイツを抜いた。2010年には日本を抜いて、世界第二となることは確実だ。2009年の日中両国のGDP



(資料) IMF、2009年の中国は速報、日本は予測。(資料) 日本自動車工業会、中国汽车工业协会

を比較すると、日本の GDP は 5 兆 950 億ドル（内閣府予測）だが、中国の GDP は 4 兆 9090 億ドル（1 月 21 日国家統計局速報、為替レート換算）で、僅差で追いつけているからである。

- (2) 2009 年に中国の自動車販売量は 1364 万台となり、アメリカの 1043 万台を超えて世界最大となった。
- (3) 輸出額は 1.2 兆ドルでドイツを抜いて世界一となった。
- (4) 東京証券取引所の株式売買金額は 2009 年に 3.9 兆ドルであったが、上海は 5 兆ドルを超えてアジア第一（ナスダック、ニューヨークに次いで世界 3 位）となった。時価総額では東京 3.3 兆ドルに対して、上海 2.7 兆ドルであり、東京に及ばないが、その成長力からして、時価総額で追い抜くのも時間の問題であろう。

こうして、かつては「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と称賛された日本に昔日の面影はなく、代わって「チャイナ・アズ・ナンバーワン」の呼び声が世界にこだまする。

以上はすべて「中国の強さ」を印象づける事実だ。だが、中国古代の哲人が喝破したように、「禍福はあざなえる縄のごとし」である。「強さ」というメダルの裏側には、「脆さ」という禍の潜むことを見失うのは、愚かである。では、中国にとって「禍」とはなにか。

一つは、勝者の奢りである。奢りに目が眩むと判断を誤る。

二つは、権力の腐敗である。著者の見るところ、中国共産党はほとんど自浄能力を失いかけている。政治の実態は、いよいよかつての国民党官僚資本主義、国家資本主義に酷似してきた。

三つは、強い中国におもねる声ばかりが世界中に溢れ、苦い良薬が見当たらないことだ。これでは権力の腐敗を掣肘できない。

「チャイナ・アズ・ナンバーワン」の呼び声こそが中国にとって最大の敵であり、危機である。旧ソ連が解体して、「一人勝ち」に浮かれた、「奢れるアメリカ」は、10 数年しか続かなかった。

中国の現状を批判的に分析する仕事がいまほど求められる時代はない。本書はその課題に挑戦したが、いまは読者のご批判を仰ぐばかりである。